

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年6月10日現在

機関番号：12606

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2010～2012

課題番号：22520130

研究課題名（和文） 中華民国期後半の上海におけるアマチュア遊芸活動

研究課題名（英文） The actual state of amateur group activities of entertainments in Shanghai during the late Republic era.

研究代表者

尾高 暁子 (ODAKA AKIKO)

東京芸術大学・音楽学部・講師

研究者番号：00397019

研究成果の概要（和文）：中華民国後期上海におけるアマチュア遊芸活動を俯瞰した。活動の主体は同業種の職員が結成した聯誼会で、平劇や国楽、粵楽、弾詞、ハーモニカ、話劇など、当時の知識層に人気の高い種目が対象となった。聯誼会は左翼運動の支援母体なので、抗日救亡歌詠運動の合唱も種目に含まれた。これら「正当な娯楽」の実践は、不安定で退廃的な時代の中で精神の平衡を保つ手段と考えられた。

研究成果の概要（英文）：In my research, I took a comprehensive view of entertainment activities practiced by amateur groups in Shanghai during the late Republic era. In this period, members of *lianyihui*, a friendship organization formed by employees in the same industry became main actors of these activities. They practiced Peking opera, national ensemble, Guangdong music, *tanci*, modern dramas, the harmonica etc., which were very popular among the intellectuals at that time. As *lianyihui* was a power base of the communist party, they introduced national salvation choruses encouraging resistance movement against Japan. These “authentic entertainment activities” were thought as a part of the equation of mind.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	800,000	240,000	1,040,000
2011年度	500,000	150,000	650,000
2012年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	1,800,000	540,000	2,340,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：芸術学、芸術学・芸術史・芸術一般

キーワード：上海・中華民国・東洋史・中国音楽・近代化・アマチュア

## 1. 研究開始当初の背景

本研究では、音楽を含む諸芸能の総体を「遊芸」と呼ぶ。これは中華民国期の一般的な語彙である。遊芸の享受には、実践と鑑賞の2側面があるが、本研究は、特にアマチュアの遊芸実践に注目した。その背景を以下のとおりである。

(1) 中華民国期の遊芸活動に関する先行研究の視点：1980年代以降、中華民国期の遊芸研究は、中国国内外で活発に展開してきた。このうち、伝統劇や芸能研究関連は膨大なもので、音楽史研究に限定すれば、以下の主要業績が挙げられる。洋楽受容については、榎本泰子『楽人の都・上海—近代中国における西

洋音楽の受容』1998、仲万美子「日本・中国・西洋音楽文化の重層的対話」大阪大学学位取得論文 1997、張前『中日音楽交流史』1999、陶亜兵『中西音楽交流史稿』、牛嶋憂子「少年中国主義と音楽史学—民国期の知識人王光祈についての試論—」桜美林大学修士論文 2001 など。このほか、劉天華や阿炳、蕭友梅など近代中国音楽の創出に関わった個人を対象とする研究も枚挙にいとまがない。

メディアと遊芸の関連については、Benson, Carlton. “The Manipulation of *Tanci* in Radio Shanghai during the 1930’s.” *Republican of China*, Vol.20, Issue2 (April 1995), pp.117-146、がラジオで語り物芸能の弾詞が放送された結果、本来の上演の場から切り離されて、様々な宣伝に供される過程を記した。レコードについては Andrew F. Jones *Yellow music: Media culture and colonial modernity in the Chinese Jazz age* (2001)を皮切りに、葛涛「電波中の唱片之声——論民国時期上海廣播唱片的社會境遇」『史林』2005年05期、pp. 53-61,128 や、容世誠「清末民初的粵樂唱片業與廣東曲芸 (1903-1913)」香港中文大學『中國文化研究所學報』2001年新第十期 pp.511-539 ほかが続く。映画研究はメディア研究でもっとも割合が高く、欧米を中心に先行研究は数多い。

上海の都市音楽文化に絞った研究では、上海音楽学院の洛秦教授が 2005 年後半から率いる専門プロジェクトがあり、従来目がむけられなかった上海の音楽と政治、経済、社会、文化諸活動への相互影響をとりあげる構想だが、申請当時、汪之成『俄僑音楽家在上海 (1920s-1940s)』2007 と孫繼南『黎錦暉與黎派音樂』2007 の 2 篇であった。

以上のとおり、既往研究の視点は、おおむね音楽の専門家や、洋楽受容、メディアの浸透と遊芸の関連に集中する。その反面、橘田勲「清末民国初江南における文人琵琶樂の成立と展開」(大阪大学学位論文 2006) を例外として、アマチュア遊芸活動への言及は乏しい。近代中国音楽史では、「アマチュア遊芸活動をもとに新しい国樂が創出された」、とくりかえし語られるにも関わらず、当時のアマチュア遊芸活動については、全貌は明らかにされてこなかったと言わざるをえない。

## (2)進展する中華民国期研究と中国都市研究：

次に、研究背景の視点を近年の中華民国史研究に広げると、社会史からみた都市研究がとみに盛んであり、とりわけ上海研究の占める割合が高い。研究テーマとしては、慈善や公益事業を担う団体や結社、大学卒業者を中心とする俸給生活者 (= 社会的中間層) どうしの連携、都市のエスニシティ、居住空間と近隣関係など、多様で複雑な都市生活者の紐帯に高い関心が払われている。なかでも日

本上海史研究会編『上海—重層するネットワーク』2000 は、治安、経済、政治など諸側面で築かれたネットワークが、さらに他のネットワークと重なりあい、「社会」を構成する実相を明快に描き出した。上海の同郷人脈に関する研究も、ネットワーク研究の一環とみなせるだろう (帆刈浩之「広東幫華人の慈善ネットワークに関する史的研究」1999 年度東京大学文学部人文社会系研究科博士論文、郭緒印『老上海的同郷団体』2003 ほか)。

本研究に直接関連する先行研究としては、岩間一弘「民国期上海の新中間層」東京大学大学院総合文化研究所地域文化専攻博士論文(2005)がある。岩間は、上海の大卒者を中心に形成された俸給生活者の娯楽に注目し、民国期前半の娯楽は、会社組織等では経営者や幹部など上層階級に占有されたのに対し、後半は経済的なゆとりをもった俸給生活者があらたに聯誼会を結成して、親睦を深めるとともに娯楽を享受した、と整理した。同論文は、銀聯 (銀行職員の組織) の娯楽に注目し、具体的な種目に言及した数少ない研究だが、中身や享受の実態にはふれていない。

(3)筆者の研究状況：上記(1)の通り、既往の中華民国期の音楽史研究に欠けたアマチュア音楽活動への視点と、社会学的先行研究が示した人的ネットワークの重要性を考慮し、平成 18 年度から「中華民国期上海のアマチュア組織活動と音楽消費の実態」(科学研究費補助金基盤研究 C、課題番号 18520082)を実施した。具体的には、中華民国期前半のアマチュア遊芸活動について、各組織の結成目的、上演の機会と目的、上演内容など諸項目を整理し、ほんらい遊芸と無縁な組織が、龐大な労力と時間を遊芸活動に傾けた実態をあきらかにした。

遊芸とは身を以て体現する文化資産であり、ブルデューの言をかりれば、特定の社会階層や出自に属する人々のハビトゥスの一環である。伝統的な遊芸ほど特定集団との結びつきが強い。その意味で、各組織が“連絡感情”(気持ちを通わせ合う)をスローガンとして遊芸にまい進したのも、当然のなりゆきであろう。さらに、当時の遊芸は娯楽や親睦にとどまらず、教育資金や災害援助金を調達する義損活動に必須の手段だったことも特筆にあたいする。それゆえに、多彩な演目を観客に提供し、エンタテイメントとしての注目度を高めるため、複数の組織が連携して遊芸会を開催したのである。

## 2. 研究の目的

1 の(3)で述べた、民国期前半を対象とした

アマチュア遊芸活動の研究をもとに、民国期後半を対象として、アマチュアの遊芸実践をさぐることを目的とする。孤島期（1937-1945）の上海経済は畸形的な発展をとげ、映画、ラジオ、レコード、雑誌グラビアなど各種メディアも広く浸透した。同時に、日本軍の侵攻にたいして抗日の気運が高まった時代である。こうした社会の変動が遊芸活動に影響を及ぼしたのか？その確認も本研究の課題に含めた。

また上記1(3)で取り上げたハーモニカや、広東出身者が愛好した粵楽（＝広東音楽）など、民国期上海の特殊事情を背景として成長をとげたジャンルにも焦点をあて、音楽の中心（曲目、曲種、演奏形態など）について把握をめざした。前回の科研調査では、ハーモニカ普及に貢献した台湾出身者や、儒教復興を主張して修正主義の批判を受けた音楽活動家について、中国国内では情報が十分に公開されていない状況にも直面した。そこで今回は台湾や欧米にも情報ソースを求め、民国期前後期を通じた遊芸活動の詳細を理解したいと考えた。

### 3. 研究の方法

遊芸の享受には鑑賞と実践の2側面があり、実践者は概ねプロとアマチュアに区分される。筆者の主な関心はアマチュア遊芸実践にあるが、この考察には、民国期後期の上海における遊芸全般の把握が不可欠である。そこで下記(1)のとおり上海刊行の日刊紙2種の遊芸関連記事を通読し、流行したジャンル、当時の遊芸観を概況概観した。

下記(2)では、アマチュア遊芸の母体となった組織に注目し、民国期後期に台頭する同業種労働者の親睦組織“聯誼会”と、民国期前期から存在した同郷会を中心として、活動状況を調査した。

下記(3)では、中華民国後期にアマチュア音楽実践の2大ジャンルとなった、ハーモニカと粵楽を対象として、楽譜や教材、実践記録を収集し、享受の実態を検討した。

#### (1) 民国期上海刊行の新聞「申報」「文匯報」の遊芸記事調査（国内）

筆者の前掲科研——「中華民国期上海のアマチュア組織活動と音楽消費の実態」——では、「申報」を主な情報源とした。1910年代～30年代前半にかけて、同紙が「団体消息」「遊芸消息」「自由談」などの各欄で、多くのアマチュア遊芸活動の情報を掲載したからである。しかし1935年を境に、記事の大半が遊芸場の広告（映画、演劇）ほか、プロの遊芸情報に偏り、アマチュア遊芸活動の詳細記事はほぼ姿を消す。とはいえ、アマチュアも参加する慈善遊芸会の消息も散発的に見られ、30年代後半から定着するラジオ放送

番組欄では、アマチュア組織の活動も伺えることから、同紙の調査を続けた。いっぽう「文匯報」は、1938年1月～1939年5月停刊、1945年5月復刊～1947年5月停刊と刊行期間は短く、アマチュア遊芸関連記事も決して多くはない。ただし、孤島期上海の遊芸観や、戦時下の慈善遊芸活動の記事も散見されるので参照対象とした。

#### (2) 聯誼会（各種同業団体の職員親睦組織）、および同郷会関連資料の収集（上海）

1930年代後半、抗日戦争前後の上海では、各種同業団体の職員が、会社の枠を越えた親睦組織を結成した。これが聯誼会である。会員は各業種の専門知識や一般教養を高めると同時に、親睦を深め、正しい娯楽や福利の享受を求めた。聯誼会の設立時期は日本軍の進攻と相前後するため、活動の主眼が抗日救亡運動（＝救国運動）に置かれる傾向は顕著であった。

これら組織の遊芸活動を確認するために、筆者は2010年に上海上海市檔案館で、以下の諸資料を収集した。『保聯』（上海市保険業業余聯誼会、1936年結成、以下保聯）の会員誌）、『上海銀錢業業余聯誼会成立大会記念刊』（1936年結成、以下銀聯）および同会『成立三週記念第五屆會員大会特刊』、『華聯同業会會員題名録』（外国企業の中国人職員が結成した聯誼会の組織案内、1938年結成）、『救亡週刊』（雑糧業同人聯誼社会誌）他。

また同郷会については、上海上海市檔案館所蔵の「旅滬（在上海の意）」同郷会記録、全44団体分を閲覧し、遊芸活動の有無や内容を確認した。

#### (3) 特定音楽ジャンルの資料収集

##### ① ハーモニカ（＝口琴）

中華民国期上海のアマチュア遊芸で、突出した組織力を持ったのがハーモニカである。王慶勳の中華口琴会結成（1930）を機に、ハーモニカ同好組織は上海から瞬く間に中国全土、さらに海外にまで広がった。筆者は前掲科研調査の過程で上海のハーモニカ愛好組織に強い関心を持ち、同時期中日両国との関連を含めて、普及活動の実態を考察した（拙稿「兩大戦間期中日ハーモニカ界にみる大衆音楽の位置づけ」『東京藝術大学音楽学部紀要』33, pp.15-34, 2007）

上掲論文では、組織作りのシステムやメディアの活用など、普及活動のハード面に注目したので、本科研では曲目を中心にソフト面の中日比較を試みた。これに先立ち、日中両国の楽譜や教則本を収集した。収集先は、中国国家図書館、上海市図書館、国会図書館（本館・関西館）である。この他に、古書店からの購入品も加えた。

なお、中華口琴会の創設者、王慶勳とその兄弟や、中国初のハーモニカ教本を刊行した柯政和らは台湾出身であり、彼らの音楽学習歴や活動歴について、中国国内の資料は乏しい。そのため、王慶勳が台湾で主催した中華口琴会台湾支部への情報提供を依頼したが、同会も世代交代をへて、王兄弟と直接交流のあった人物とはコンタクトがとれなかった。幸い、王慶勳が上海の中華口琴会に招聘した故計大偉氏（元国立台湾芸術大学教授）が、子息の安邦氏に語った王慶勳の活動歴が2011年に公刊され、ウェブサイトでも公開されたので、これを参考資料に加えた（計安邦「中華口琴會王慶勳理事長與在臺推手計大偉」『國史館館訊 06 期』pp. 188-209, 2011）。

## ② 粵楽

中華民国期上海のアマチュア遊芸で、もう一つ特筆すべきは粵楽である。粵楽は、広東省珠江の三角洲地区で誕生した、雑多な来源をもつ器楽である。形成期（1860～1920年）を経て、1920年から成熟期に入ると、アマチュア組織は急増し、愛好者は地元広東から他の大都市へと急速に広がった。とりわけ上海の活動は活発で、粵楽の成熟と発展への貢献は最も高いと言われる。

本科研では、アマチュア組織を含む粵楽全般の基礎資料を、香港中文大学中国伝統音楽資料館で収集した。また、上海でアマチュア粵楽団を擁した精武体育会関連資料を、上海市檔案館で収集した。

## 4. 研究成果

### (1) 新聞資料からみた民国後期上海の遊芸――内訳と享受者層

第二次上海事変後、孤島期（1937, 11～41年）の上海では、租界地としてある安全が保証されたため、経済が畸形的発展をとげた。富める街に娯楽施設が林立し、ダンスホールや劇場、映画館のほか、プールやスケート場など新しいスポーツ施設も登場した。気まぐれな消費者心理を競いあうように、新奇な娯楽が現れては消える時代であった。

この時期の上海といえば、ダンスホールにジャズバンドという、ステレオタイプのイメージが強調される嫌いがある。その実、当時もっとも幅広い支持を得た遊芸は、平劇（＝京劇）であった。民国期をつうじて上海は北京とともに平劇の2大拠点であり、中・上流階層の愛好者は、夥しい数の票房（京劇の票友＝アマチュア愛好者の同好組織）を結成して自慢の喉を競いあい、アマチュアの舞台にも立った。富裕層の中には、自宅にプロの芸人を招き、貸し切り舞台を票友と楽しむ「堂会」を催す者もいた。プロはだしの著名な票友は、民国前後期をとおして各種の慈善遊芸

会に出演し、義損金獲得に不可欠な存在でもあった。こうした振る舞いは、もともと上流階層のステイタスシンボルである。しかし民国期後期には、聯誼会会員も票友として義損活動に参加し始めた。1939年2月20日の「上海難民救済協会票友組勸募委員会」主催、ラジオ放送による募金活動では、銀聯が、倶楽部（団体役員の見睦組織）や、一般の票房団体と肩を並べた。ちなみに、同日の総出演者数は700名にも及ぶ（『文匯報』）。聯誼会メンバーは、経済成長に伴い経済的なゆとりを得たサラリーマンである。彼ら新エリートにとって、遊芸を通じた社会参加は、富裕層への追従というより、救亡活動達成の一過程と受け止められた可能性は高い。

ふたたび遊芸種目に戻ると、一般大衆が、インテリ富裕層や新エリートとは異なる種目や遊芸の形態を好んだことは、インテリの弁で明らかである。1939年2月19日の「遊芸状最近動態」（『文匯報』）はこう記す：「近年増える小型劇場は、高級な平劇や映画館とは比べようもないが、価格の安さと内容の多彩さが人々を惹きつける。一般の低級な観衆は、大京班文明戲や映画、四明宜卷、紹興文戲、申曲が好きなのだ」。大京班文明戲とは、成人男優が演じる初歩的な改良京劇で、北方方言を用いる韻文の科白を省き、歌の分量も少なく、散文の科白による滑稽芝居が多い。四明宜卷は地元浙江に広まる仏教系語り物。紹興文戲は紹興地方に発した伝統劇、申曲は地元上海の伝統劇である。清末民国初頭にかけて、上海近隣地域では上記の紹興文戲や申曲、蘇灘（蘇州地方の伝統劇）など、新興伝統劇が成長をとげつつあった。各方言を解する上海在住者や地元民は、これらの演劇を好み、1930年代以降はラジオの定番種目にもなった。このほかに、浙江省蘇州の語り物「彈詞」、粵曲（広東地方の伝統劇）、滑稽（漫才など滑稽な話芸）、話劇（日本の新劇に相当）、歌唱、江南絲竹（上海を含む江南地方の器楽合奏）、ハーモニカ、粵楽（広東地方の新興器楽）などが挙げられよう。

各遊芸の人気の如何は、ラジオ番組の構成からも見て取れる。晩莢の記名記事「畸形發展下的播音界(下)」(1939年3月14日、『文匯報』)は、1週間の全ラジオ局による番組数を種目別に整理した。遊芸関連の内訳は以下である：音楽9、平劇5、故事64、評劇20、彈詞97、話劇25、蘇灘4、歌唱26、申曲65、文書7、文戲11、戲曲19、宜卷25、滑稽39、唱片(レコード)165。1位は彈詞、2位は申曲、3位は故事、4位は滑稽である。総じて、地元上海を中心とするローカルな芸能と、滑稽な芸態が人気を集めたと言える。項目を執筆した晩莢は、「彈詞番組が圧倒的に多いのは聴取者の好みか。それともスポンサー企業の嗜好？」と疑問も呈するが、彈詞

については「文匯報」「申報」ともに言及が多いので、社会階層を問わず広く浸透していたと考えられる。

## (2) 聯誼会資料と同郷会資料に見る遊芸の実践

上記(1)は、京劇を除くと、鑑賞対象としての遊芸ランキングと言える。一方、実践ランキングについては、残念ながら庶民の遊芸実践を推しはかる材料は見当たらず、知識層の同楽会・遊芸会情報も、新聞では1930年代後半から激減するため、資料不足の観は否めない。ただし、聯誼会の遊芸種目と実践については、各組織の刊行物から以下のとおり推測が可能である。

①聯誼会の活動趣旨と遊芸種目：今回資料を入手した銀聯、華聯、保聯のうち、前二者は最盛期の会員数が1万人以上に及んだ、代表的団体である。組織の区分に出入りはあるものの、上記3者に共通するのは、感情を通わせ、学識を交換し、正当な娯楽を提唱し、福利事業に力を注ぐことだった。急速な経済発展が生んだ退廃的生活におぼれず、精神肉体の両面で健全さを発揮できる環境を与えることが目的であった。民国前期の同郷会や学校組織が行った同楽会も、親睦を旨とし遊芸がその手段となった。これらと聯誼会との最大の違いは、抗日救亡の非常事態と退廃的都市生活のはざまで、「正当な娯楽」によって精神の平衡を保つことであろう。会員は、聯誼会が開設した学術、娯楽、体育、出版、図書館各部門で、スキルアップし、知的好奇心を満たし、精神と肉体を解放し、会食や旅行の企画にも参加できた。

「正当な娯楽/遊芸」の具体的な種目には、平劇、話劇、崑曲、弾詞、魔術(マジック)、国楽(江南)絲竹、粵楽、歌詠、声乐、口琴(ハーモニカ)、管絃楽隊、ヴァイオリン、ピアノ、将棋、漫画、撮影などが含まれた。このうち多くの聯誼会に共通したと考えられるのは、平劇、話劇、弾詞、マジック、歌詠、口琴など、この時代の流行ジャンルである。特徴的なのは声乐/歌詠である。1937年以後、上海外で急速に加熱する救亡抗日歌詠運動は、上海では日本軍の目を避けて表立った展開を見せなかったが、左翼運動の支持母体である聯誼会では堂々と展開していたことが分かる。『保聯』の歌唱部紹介にも、「我々は古風なスペインタンゴも、流行のラブソングも、ボックリーニのセレナーデも歌わない。我々は時代の歌を歌っているのだ。ふだん叫ぶことが許されない我々は、一週間心に閉じ込めていた悩みや憂さを、この時とばかり発散するのだ…」という一文が見られる。プチブル的音楽趣味を否定し、戦闘的な音楽を奨励する傾向が十分に見取れる。

各種目の教習にはプロやセミプロがあた

り、発表会も催されるなど、恵まれた学習環境が確認された。

## ②同郷会と遊芸活動

同郷会は、民国前期には遊芸活動の有力な担い手であった。しかし第二次上海事変を経た後期には、同郷者の福利や教育機会の提供に活動の中心が移り、メンバー自体の親睦や娯楽の手段としては、遊芸はほとんど表面化しなくなった。筆者が調査した同郷会44団体の運営記録でも、わずかに数例が、娯楽の一環として平劇の重要性に触れただけである。戦乱を経て、同郷会のありかたは変化し、アマチュア遊芸の担い手の側面は薄れた、と言えよう。

## (3) 上海のハーモニカ音楽と粵楽

### ①ハーモニカ

アマチュア音楽の代表、ハーモニカは、民国後期に組織数を増やし規模も拡大した。今回は民国前期も含めて、上海を中心とする中国のハーモニカ音楽と、中国に影響を及ぼした日本のハーモニカ音楽を比較した。要点は以下のとおり。

日本のハーモニカ曲は、江戸、明治、大正、昭和にまたがり、各時代の音楽潮流を反映する媒体だった。邦楽VS外来楽、庶民VSエリートの区別はなく、雑多なジャンルを再生した。いっぽう中国では、日本で堆積した曲目から、伝統音楽以外の大部分を短期間に吸収した。日本の楽譜集からの選択率が高い要因として、日本教育を受けた台湾出身者が初期中国ハーモニカ界の指導者となったことが指摘できる。

日本では昭和初期以降、多様な流行歌をハーモニカ曲に編曲したが、初期の中国の楽譜集では選択されていない。また日本の伝統音楽はハーモニカに編曲されたが、上海で人気の申曲や弾詞などは対象外である。社会のエリート層が、理想的な大衆教育の一環として普及に尽力したために、ほんらい最も庶民の心をとらえる音楽とは相容れなかったの？その回答を得るため、民国後期の楽譜まで今後さらに対象を広げた、検討が必要である。

### ②粵楽

広東のローカルな器楽でありながら、粵楽は中華民国期に全国的に普及した。要因は複数あり、黎田、黄家齋『粵楽』(広東人民出版社、2003)ほかは、以下のように解釈する。

粵楽は洋楽の要素を大胆に吸収し、当時の人々に新鮮な印象を与えた。これがレコード会社の目にとまり、大量の粵楽レコードが吹き込まれた。これらの製品は日本軍が侵略した東北地方で特に歓迎を受け、同地方では多くの中国人アマチュアグループが粵楽を演奏した。やがて1937年以降、抗日救亡運動が本格化すると、共産党の根拠地、延安にも粵楽が音楽家によって持ち込まれ、演奏会を

通じて、同地に集合した全国の音楽家や研究者、作曲家から認知された。

また無声映画時代、粵楽は上海の映画館で伴奏に頻繁に使われ、市民は粵楽の音響になじみがあった。ラジオ放送の定着後は、粵楽が流行歌の放送冒頭で前奏として使われることもあった。このように、粵楽の流行は他ジャンルに比べて、メディアとの関わりが非常に強いことを改めて確認した。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計3件)

##### ①Akiko Odaka

“The resonance hole with membrane; a distinctive feature of East Asian transverse flutes”, *Journal of the Acoustical Society of America* (J. Acoust. Soc. Am. 2013) 査読有、\*媒体はCD-R、頁数、巻数なし

②尾高暁子「東京音楽学校管理文書にみる中国人留学生」『東京音楽学校の諸活動を通して見る日本近代音楽文化の成立——東アジアの視点を加えて——』(研究代表:大角欣矢 平成20~23年度科学研究費補助金(基盤B)研究課題番号20320030 報告書)、査読無し、pp.312-356、平成2013年3月

##### ③田中多佳子、梅田英春、尾高暁子

「大正琴の伝播と変容—台湾、インドネシアおよびインドの事例—」『京都教育大学紀要 No.120』査読有り、2012年3月 pp. 120, 121-137

[学会発表] (計4件)

①尾高暁子「両大戦間期の日中ハーモニカ音楽:曲目比較にみる両地の音楽・社会事情」第10回 日中音楽比較研究国際学術会議、2013年3月27日、東京芸術大学

②尾高暁子「台湾・中国の大正琴」日本音楽学会(支部横断企画)、2012年10月20日、静岡県立芸術大学

③尾高暁子(ODAKA Akiko) The resonance hole with membrane; a distinctive feature of East Asian transverse flutes. Acoustics 2012(米、中、香港、太平洋地区音響学会2012合同大会)2012年5月2日 Hong Kong Conference and Exhibition Centre

④尾高暁子「東京音楽学校管理文書にみる中国人留学生」『第9回中日音楽比較研究国際学術会議』山東師範大学音楽学院、2011年10月13日

#### 6. 研究組織

##### (1)研究代表者

尾高 暁子 (ODAKA AKIKO)  
東京芸術大学・音楽学部・講師  
研究者番号:00397019

##### (2)研究分担者

( )

研究者番号:

##### (3)連携研究者

( )

研究者番号: